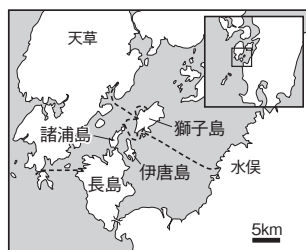


③ ながしま長島ほか（鹿児島県長島町）——長島大陸Nセンター

高校のないまちに高校を 通信制高校との連携で生まれた島の教育拠点

長島大陸Nセンター 所長 神明 竜平



長島町：長島本島、諸浦島、伊唐島、獅子島の有人島のほか大小23の島々からなる。総面積116.23km²、人口10,778人（平成29年2月末現在）。基幹産業は農業と漁業で、食料自給率は100%を超える。「養殖鰯」の生産額では、日本一を誇る。

●先駆的な取り組みが続く長島

長島町は鹿児島県の最北端に位置し、北に天草諸島を望み、東は八代海、西は東シナ海に囲まれ、南の阿久根市との架橋によって九州本島とつながっています。もともとブリやジャガイモをはじめとした特産物を多く産出するまちでしたが、特に平成二十七年、地方創生人材支援制度によって、総務省から井上貴至氏を副町長として迎え入れて以降、外部企業や組織との協力、誘致が進んでいます。卒業後、町に戻ってくれば返済を免除される「ぶり奨学金」をはじめとした数々の先駆的な取り組みを実施しています。

●高等教育機会の確保による人口減少の抑制に向けて

長島大陸Nセンターは「高校のないまちに高校を」というコンセプトのもと町内に設立された町営の教育拠点です。長島町は平成一九年に町内唯一の長島高校が閉校になった後、高校がないまちとなりました。本町のような近隣自治体から距離がある島では、まちから高校が消えることの影響は大きく、子どもの中学卒業と同時に家族ごと転出していくケースもみられます。合計特殊出生率が二・〇〇を上回る長島町であっても、二〇四〇年までに約三割の人口減少が予測されている理由は、このような転出による社会減が予測されるためです。長島大陸Nセンターの使命は、町内における義務教育後の教育機会を確保することによつ



役場内に整備された長島大陸Nセンター。学びの場として自習室、イベント会場、会議室など多様な用途で活用されている。

て、人口減少を食い止めることです。

とはいえ、全日制の県立・私立高校を新しく設立・誘致することは大きなコストを伴う難事業です。そこでパートナーとして白羽の矢が立ったのが、情報通信企業大手のドワンゴ社が手がける通信制高校「N高等学校」でした。

N高校では、インターネット上で授業を受講し、レポートを提出しながら高校卒業資格を取得できます。そして、従来型の通信制高校とは異なり、高卒資格取得のほかに、

インターネット企業の強みを活かしたさまざまなコースが受講可能です。プログラミング講座、小説講座、ファッションデザイン講座など、在籍する数千人の生徒が各々の興味関心にあわせて多種多様なコースを選択できるのが同校の最大の強みといえます。

本町ではN高校と提携し、教材を提供してもらいつつ、空き施設（町役場の一角）を改装し、地域おこし協力隊（私もその一人）をスタッフに充てることによって、数百万円という通常では考えられないほど安価に、新しい「高校長島大陸Nセンター」を設立することに成功しました。

●島ならではの強みを活かした高校生受け入れ事業

もちろん、高校の形を整えただけで、高校生がどんどん通い出すわけではありません。そこで、高校生を長期的に受け入れていく体制をつくる前段階として、高校生を短期的に受け入れる体験プログラムを複数実施しました。

代表的なプログラムが「島TECH」です。これはN高校に在学中の高校生をはじめ、全国の高校生を長島大陸Nセンターに集め、五泊六日の合宿型プロジェクト学習プログラムを体験してもらうものです。

プログラム実施中、高校生は、農業・漁業者など生産者の家にホームステイをします。ただし、よくある民泊・職業体験と違うのは、民泊する高校生たちが、チームを組んで生産者のホームページを制作することです。これは実際に生産者が今後利用していくホームページとなります。

長島町の住民の約四割が第一次産業従事者で、本町には魅力的な生産物が数多く存在します。ブリやジャガイモ、デコポンなどが有名ですが、ほかにも豊かな海と土壌に育

まれたたくさんの商品があります。一方、生産者が消費者に直接生産物を届ける「六次化」の必要性が叫ばれる中で、その中核となるはずのホームページを持たない事業者が多数を占めているのが現状です。

「島TECH」のプログラムは、生産者が宿泊場所を提供する対価として、高校生がホームページを作成することが特徴です。民泊先の生産者へは宿泊謝礼金をお支払いしていません。ニーズの「マッチング」が成立しているからです。WEBや写真のプロが講師としてプログラムに参加す



今後、長期的に高校生を受け入れることを見据え提供している短期体験プログラム「島TECH」。



現役で活躍するプログラマーが高校生の指導にあたる。



「島TECH」で実際に高校生が制作したエグチベジファーム社のホームページ。

●島での教育のロールモデルに

るため、高校生のつくるホームページはプロ顔負けです。こうして、生産者と高校生が対等に長島町で活動する機会を提供し、町の事業者に直接的なメリットも提供して産業振興を行いながら、先進的で本質的な教育機会を実現することで、本町を学びの場としてPRしていくことができる取り組みとなっています。

「島TECH」は回を重ねるごとに発展しています。



豊かな自然環境があり、生産現場と社会課題が近い長島では、濃密で高付加価値な教育体験を実現できる。

民泊先の確保も進み、同時に長島町に興味関心をもつ高校生
生の層は確実に拡大しています。そして何より町民と協力
し、信頼を得ながら活動を続けていくことで、地域に根づ
いた教育拠点としての足場が確立されようとしています。
平成二九年度から三〇年度にかけて、Nセンターでは本
丸である町内の高校生の募集・受け入れも進めつつ、町外
の高校生を一定期間受け入れることで交流を促進し、
「高校のないまちに高校を」というビジョンを具現化させ
ていく予定です。

人口一万五〇〇〇人の小さな地方の町出身の私には、も
っと先の「野望」
もあります。「高
校のないまちに高
校を」とは、とも
すれば都会と田舎
の教育格差を埋め
る、という発想に
なりがちです。し
かし縮小均衡する
地方の現実を踏ま
えると、この考え
方の延長では、よ
り低コストな高等

教育を実現することも、自治体の存続の観点では「延命治
療」にしかならないと危惧しています。

一方、東京で一〇年近く過ごした私が感じるのは、長島
町をはじめとした地方の小さなまちには、間違いない都市
にはない魅力があるということです。教育の観点でいえば、
豊かな自然環境、生産現場と社会課題の近さです。

こうした資産を活用し、都会では実現できない濃密で高
付加価値な教育体験を実現することで、東京の学校とは異
なる競争力によって、攻めの姿勢で臨むことを信条として
います。平成三二年に予定されている高校・大学の一体的
な教育改革の流れも追い風になっています。五教科の認知
的（学力検査などで測定可能な）学習だけでなく、課題意識と
コミュニケーション能力をはじめ
「生きる力」を持った高校生が大学
入試でも評価される流れが形成され
ており、この点は地方の拠点が都会
よりも有利になるポイントといえま
す。

私は長島町でモデルをつくり、他
の地域のお手伝いもさせていただき
ながら、地方から現代の教育の常識
を良い意味で覆していきたいと思っ
ています。

神明竜平（しんめいりゅうへい）

昭和63年大阪府岬町生まれ。東京大学法学
部卒業後、DeNAにてゲームプロデューサー
として、東京・米国・シンガポールなどで勤務。
平成28年に退職し地域おこし協力隊として
長島町に移住。長島大陸Nセンターを立ち上
げ、所長に就任。秋田県湯沢市とのラップ動
画対決をプロデュースしたことで話題に。